

Ascension

アスセンション

知っておきたいキリスト教のことば (102)

昇天 しょうてん

「しょうてん」と聞くと、思わず日曜日の夕方のテレビ番組を思い出す人も多いのではないのでしょうか。あれは「笑点」と書きますが、キリスト教でよく使われるのは「召天」と「昇天」です。

「召天」は字のとおり、天に召されるという意味です。誰かが亡くなった時に用いる言葉です。(逝去や帰天ということもあります)

今回は「昇天」についてみていきたいと思います。昇天とは簡単にいうと、天にあげられることです。初期のキリスト教会では、義人(正しい人)は天に昇るという思想に依拠しており、パウロの手紙の中にある賛歌には、その影響を受けているものもみられます。

このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(フィリピの信徒への手紙 2 章 9 節)

ルカによる福音書 24 章と使徒言行録 1 章には、イエス様は復活された後、40 日後に昇天したとあります。旧約聖書にもその言及があります。たとえば詩編 68 編 19 節「主よ、神よ あなたは高い天に上り、人々をとりこし 人々を貢ぎ物として取り、背く者も取られる。彼らはそこに住み着かせられる」などがその一例です。またイエス様自身も、将来天にのぼることを、ヨハネ 20 章 17 節で語っています。

そして聖書は、昇天はイエス様の力でなされたことではなく、神さまの力によってなされたということを強調しています。この昇天によって、人間であったイエス様が神さまの栄光の状態にあげられたのです。

つまりこの昇天は、イエス様が神さまによって確証された義人であり、救い主として即位した出来事であるといえるのです。

次回は「証人」です。楽しみに。



「主の昇天」

ジョット・ディ・ボンドーネ

(1267 頃～1337 年)

こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。

(使徒言行録 1 章 9 節)

